

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

# 日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって —日本語教師のための日本語文法をもとめて—

**On Inflection Forms of the Verb in Japanese**

中 崎 崇  
城 田 俊

# 日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって

—日本語教師のための日本語文法をもとめて—

On Inflection Forms of the Verb in Japanese

中 崎 崇 (表現文化学科)

NAKAZAKI Takashi

城 田 俊 (獨協大学)

SHIROTA Shun

キーワード：日本語文法、動詞、語形、語形変化

## 0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿は、中崎・城田(2017a)(2017b)に引き続き、日本語教育<sup>i</sup>のための新しい日本語文法教科書の作成を目指して、動詞は、形態の特徴からみていかなる種類があるのか、単語として文中においてどのようなかたちをもち、どのような意味をもって、どのようにつくられるのかといったことについて検討するものである。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。

## 1. 動詞の種類

動詞は、語幹(変化しない部分)が子音で終るか、母音で終るかにより、次の3つのグループに分けられる。日本語教育においても、それぞれの呼び名は異なるものの、この3分類は一貫して用いられる。<sup>ii</sup>

- (1) a. Iグループ=子音語幹動詞(語幹が子音で終るもの)
- b. IIグループ=母音語幹動詞(語幹が母音 e/i で終るもの)
- c. IIIグループ=クル、スル

Iグループの動詞は、すべて辞書形の末尾が *kaku* 「書く」、*kogu* 「漕ぐ」、*kamu* 「咬む」、*sinu* 「死ぬ」、*tobu* 「飛ぶ」、*tatu* 「立つ」、*naosu* 「直す」のように語尾の末尾音の *u* の前が *r* 以外のものが該当する。つまり辞書形の末尾が *r+u* 以外のはすべてIグループの動詞である。

逆に辞書形の末尾が *r+u* であれば、後述する一部を除きIIグループの動詞となる。具体

的には、taberu「食べる」、ikiru「生きる」のように辞書形の末尾が r+u であるもののうち、tabe(masu)、iki(masu) のようなマス形語幹「汎用形 (連用形)」が、その r を残さずに、e/i で終るものは母音語幹動詞である。

なお、kau「買う」warau「笑う」のように a などの母音 + u で終るものの語幹末は w を仮設しておく。つまり、それぞれ kau、warau ではなく ka[w]u、wara[w]u と考える。この w は、kaw-anu「買わぬ」、waraw-anu「笑わぬ」といった叙述形 (辞書形) の現在形の否定形をつくる助辞 -(a)nu などに続く際に顕在化する (それ以外の場合は潜在化する)。後述するように、kiru「切る」など辞書形の末尾が ru で終わるものも I グループの動詞の中には存在する。これらを含み、子音語幹動詞の子音語幹末は k,g,m,n,b,t,s,[w] および r しかない。p,h,d,z[dz],y[j] は語幹末子音として存在しない。

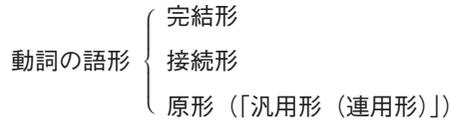
I と II の区別は、基本的には上述の辞書形の末尾で判断できるが、辞書形では判断がつかないものは、マス形語幹 (「汎用形 (連用形)」) の情報を加味することで判断できる。辞書形の末尾が r+u であるもののうち、マス形語幹 (「汎用形 (連用形)」) がその r を残して、i で終るものは子音語幹動詞である。例えば、kiru「切る」、kiru「着る」は辞書形では判断がつかないが、マスをつけるとそれぞれ kirimasu「切ります」、kimasu「着ます」となり、kiri のように r を残すものが I グループ、ki のように残さないものが II グループの動詞となる。<sup>iii</sup>

Ⅲに属する 2 種の動詞は不規則変化するものとされる。本質的には、両者共、母音語幹動詞である。ただし、その母音は sita「した」、suru「する」、seyo「せよ」、kita「来た」、kuru「来る」、koi「来い」のように変化し、その母音は [i~u~e]、[i~u~o] のように特定されていないものである。

## 2. 動詞の語尾変化 - 肯定のかたち

動詞は、kaku「書く」、kaita「書いた」、kakoo「書こう」、kaite「書いて」のように語尾変化を行う。実はこの語尾変化は学校文法や国文法でいう「活用」とは全く異なる語形変化である。語尾変化によって形成される語形のおおわくは、文の中での働き (文の終わりに使われるか、文の途中で使われるか) で、後に詳述する kaku のような I 「完結形」と呼ぶものと kaite のような II 「接続形」と呼ぶものの 2 つに大別される。I の「完結形」は、言い切ることができ、単独で完結している語形である。II の「接続形」は、そのかたちで文を、通常、終結することができず、続ける語形である。

これ以外にⅢ「連用形」と伝統的に呼ばれる語形がある。この語形は文法上の用法が特定されておらず (特定の用法をもたない語形、つまり不特定な語形)、非常に広汎な機能を持ち、日本語の動詞の「原形」とも目されるかたちである。このかたちをここでは、伝統と混乱をきたさぬことを考え、「汎用形 (連用形)」のような表記を主にとる。<sup>iv</sup>

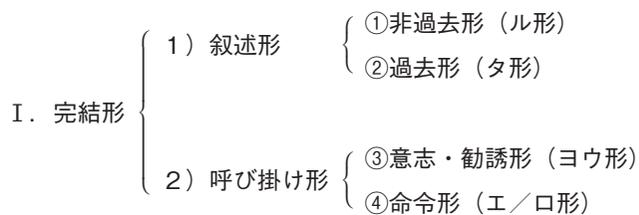


## 2.1. 完結形

単独で完結しうる語形である「完結形」は、文をめぐっての話し手の伝達的な態度・話す目的を表し分ける（このような文法的意味は【ムード】と呼ばれる）形によって、1）叙述形と2）呼び掛け形とに分かたれる。

kaku「書く」のような単に叙述する（述べ立てる）だけのかたちが1）「叙述形」と呼ばれるかたちである。この「叙述形」はさらに、文が表す出来事の発話時との時間的な前後関係を表し分ける（このような文法的意味は【テンス（時制）】と呼ばれる）形によって、kaku「書く」のような①「非過去形」とkaita「書いた」のような②「過去形」とにわかたれる。①「非過去形」は、発話時よりも先である過去といったときを表さない、つまり発話時よりも同時（現在）か後（未来）といったときを表しうる語形である。この「非過去形」は辞書形ないしル形などによばれるかたちに一致する。②「過去形」は、文字通り発話時よりも先である過去といったときを表すかたちであり、タ形ともいわれる。

kakoo「書こう」のような、他に対して働きかけるかたちが2）「呼び掛け形」と呼ばれるかたちである。この2）「呼び掛け形」は、さらに、③意志・勧誘形と呼ばれる、kakoo「書こう」のような話し手の意志的なことがらを述べたり、話し手とともにことがらの実現をはたらきかけたりするかたちと、④命令形と呼ばれる、kake「書け」のような聞き手にことがらの実現をはたらきかけるかたちにわかたれる。③意志・勧誘形はヨウ形と名づけておく。



## 2.2. 接続形

そのかたちで文を、通常、終結することができず、続ける語形である「接続形」は、まず後続する品詞の異なりにより、3.「連体接続形」と4.「連用接続形」に分かたれる。「連体接続形」（略して「連体形」と呼ぶ<sup>v</sup>）は名詞に接続し、「連用接続形」（そのまま「連用接続形」と呼ぶ）は、基本的に名詞以外のものに接続するかたちである。

II. 接続形 { 3) 連体接続形 (連体形)  
4) 連用接続形

この接続形は、さらに文中での働き (いわゆる統合的 syntagmatic な意味・機能) によっていくつかの形に分けられる。ここでは、「連体形」の下位類2つと「連用接続形」の下位類5つ、都合7つの形をあげておく。

文中において名詞に接続し、その名詞を詳しく説明する働きをもつのが「連体形」であるが、「連体形」は動詞が表す事柄の継起順序を表す形をもち、kaku「書く」のような⑤「非以前形」と kaita「書いた」のような⑥「以前形」とに分かたれる。⑤「非以前形」は「叙述形」の①「非過去形」と、⑥「以前形」は②「過去形」と、語形とその作り方は同じである。この「連体形」によって表し分けられるのは、【順序】といった文法的意味である。【順序】は、「叙述形」の【テンス】とは異なり、基準となるのは発話時ではなく、主節が表すとき (主節時) が基準となる。<sup>vi</sup>つまり、「非以前形」であれば、主節があらわすときよりも同時か後といったときを表し、「以前形」であれば、主節時よりも先であるといったときを表す。例えば、「注射した人は、ここで止血用のガーゼをもらおう」であれば、従属節の事柄 (注射をする) がなりたつのは、主節時 (止血用のガーゼをもらおうといった事柄がなりたつとき) よりも前であることを表す。「注射する人は、ここで問診票を書いた」であれば、従属節の事柄 (注射をする) がなりたつのは、主節時 (問診票を書くといった事柄がなりたつとき) よりも後であることを表す。

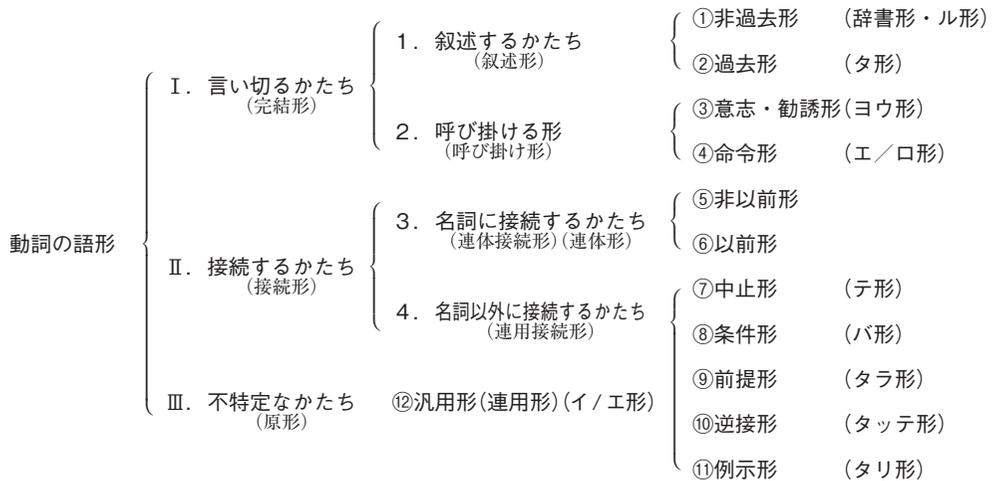
次に「連用接続形」には、文を途中でとめる (従属節の述語となるなど) かたちである⑦中止形 (テ形)<sup>vi</sup>、後ろにつづく事態 (主節でしめされる事態) が成り立つための条件をあらわすかたちである⑧条件形 (バ形)、当該の事態が、主節の事態の成立の前提となる事態であることをしめす (当該の事態の成立後に、主節の事態が成り立つことをしめす) かたちである⑨前提形 (タラ形)、当該の事態が、主節の事態の成立の条件となりえないことをあらわすかたちである⑩逆接形 (タッテ形)、いくつかの選択肢の中から任意に選んだ事例であることをしめすかたちである⑪例示形 (タリ形)、以上の5つのかたちがある。

以下に、接続形の例文を示しておく。

- (2) 注射する人は、ここで問診票を書いた。(非以前形)
- (3) 注射した人は、ここで止血用のガーゼをもらってください。(以前形)
- (4) 大学に行って、ゼミの先生に会った。(中止形)
- (5) この薬を飲めば、病気はなおります。(条件形)
- (6) 白菜はゆであがったら、氷水にひたします。(前提形)
- (7) 一生懸命働いたって、暮らしは楽にならない。(逆接形)

(8) 太郎は一日中、寝たり、起きたりしていた。(例示形)

以上を表示すると次のようになる。



### 3. 各語尾形のつくり方

動詞の語形変化で扱った語尾形はすべて、語尾助辞によって形成される。具体的にどの語尾形がどのような語尾助辞により形成されるのか、語尾形を語幹からつくり出す方法について、2. で述べた語形ごとに述べていく。

#### 3.1. 非過去形(辞書形・ル形)・非以前形

語尾形(辞書形・ル形)は、2. で述べた動詞の種類に応じた語尾助辞をつけることで形成される。非過去形であれば、それぞれ語尾助辞-uと-ru<sup>III</sup>をつけ形成する。具体的にIグループの子音語幹動詞であれば、語幹に-u、IIグループの母音語幹動詞であれば、語幹に-ruをつける。IIIグループの動詞は、先述の通り語幹の母音は変化し特定されないが、基本的には母音語幹動詞である。非過去形形成に当たっては、「来る」「する」ともに語幹末母音はuとなり、-ruがつくことになる。先に述べたが、非以前形は、非過去形と同じ語形でその作り方も同じであり、ここで述べることは非以前形についてもあてはまる。

(9) Iグループ：書ク kak-u

IIグループ：タベル tabe-ru、見ル mi-ru

IIIグループ：スル su-ru、来ル ku-ru

このII、IIIグループの非過去形をつくる-ruの-rは母音語幹に語尾の本体uを結びつける

役をはたすものである。このような、語幹と助辞を結合させる要素で、子音であるものを「結合子音」と呼ぶ。語尾の本体 u は子音語幹にはそのまま（結合のための要素をとらずに）結びつく。

非過去形は、代表語形の役もはたす。代表語形とは、具体的には各活用形で文中に存在する動詞を抽象し、そのかたちで代表させるものをいう。例えば、動詞「書く」は「書いた」「書け」「書こう」…を全てまとめて示す場合にも用いられる。非過去形が、辞書に見出し語として用いられる場合、決して叙述・非過去・肯定といった文法上の意味が示されてるわけではなく、あくまで動詞を抽象し代表させるといった代表語形としての役割をになっているにすぎない。

### 3. 2. 過去形（タ形）・以前形

過去形（タ形）は、I グループの子音語幹動詞では語幹に -ita、II グループの母音語幹動詞では語幹に -ta をつけ形成される。III グループの動詞は、過去形（タ形）形成に当たっては、「来た」「した」となり、ともに語幹末母音は i となり、-ta がつくことになる。以前形は、過去形と同じ語形でその作り方も同じであり、ここで述べることは以前形についてもあてはまる。

- (10) I グループ：貸シタ kas-ita
- II グループ：タベタ tabe-ta、見タ mi-ta
- III グループ：シタ si-a、来タ ki-ta

I グループの動詞は、過去形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合とおこらない場合がある。貸す kas-u のような語幹末の子音が s- の場合は、変容はおこらず kas-ita 「貸した」となる。

- (11) 変容なし
- 語幹末 s- 例：貸シタ kas-ita

それ以外の子音の場合は、子音の種類に応じて変容がおこる。

kat-u 「勝つ」 kar-u 「刈る」 ka[w]-u 「買う」 のような語幹末の子音が t・r・w- の場合、ka $\square$ -ita・ka $\square$ -ita・ka $\square$ -ita の $\square$ は促音（つまる音）にかわる（小さな「ッ・っ」で表記される）。つまり、いずれの場合も katta 「かった」となり、語幹末の子音が t- に変容し（語尾助辞本体の頭の t- はそのまま）、結合要素である i が消去される。<sup>ix</sup>これは形態素の融合現象である。<sup>x</sup>よって形態素間の境目が消失する（語幹と語尾の間に - を書くことができない）。この融合を促音便、これによって形成されるかたちを促音便形と呼ぶことがある。

tob-u「飛ぶ」kam-u「かむ」sin-u「死ぬ」のような語幹末の子音が b・m・n の場合、to**b**-ita・ka**m**-ita・si**n**-ita の□は撥音（はねる音）にかわる（「ン・ん」で表記される）。つまり、いずれの場合も、語幹末の子音が n- に変容し、結合要素である i が消去され、さらに語尾助辞頭音が d- に変容し、tonda・kanda・sinda となる。これも形態素の融合現象である。この融合を撥音便、これによって形成されるかたちを撥音便形と呼ぶことがある。

kak-u「書く」kag-u「嗅ぐ」のような語幹末の子音が k・g の場合、ka**k**-ita・ka**g**-ita の□はイ i（イ音）にかわる。つまり、いずれの場合も、語幹末の子音が i- に変容し、結合要素である i が消去され、g- の場合のみ語尾助辞頭音が d- に変容し、kaita・kaida となる。これも形態素の融合現象である。この融合をイ音便、これによって形成されるかたちをイ音便形と呼ぶことがある。語幹末の g（有声子音）が後続する ta を有声化することに注目したい。

#### (12) 変容あり

語幹末 t・r・w- 勝ッタ kat-ita > katta、刈ッタ kar-ita > katta、

買ッタ ka[w]-ita > katta

語幹末 b・m・n- 飛ンダ tob-ita > tonda、嚙ンダ kam-ita > kanda、

死ンダ sin-ita > sinda

語幹末 k・g- 書イタ kak-ita > kaita、嗅イダ kag-ita > kaida

I グループの動詞の過去形を形成する -ita の -i は子音語幹に語尾の本体 ta を結びつける役をはたす結合要素である。このような結合要素となる母音を結合母音と呼ぶ。この結合母音は過去形をつくる -ita 以外に、中止形をつくる -ite、前提形をつくる -itara にも見られる。

xi

### 3.3. 意志・勧誘形（ヨウ形）

意志・勧誘形（ヨウ形）は、I グループの子音語幹動詞では語幹に -oo、II グループの母音語幹動詞では語幹に -yoo をつけ形成される。III グループの動詞は、意志・勧誘形の形成に当たっては、「来よう」「しよう」となり、「来る」の語幹末母音は o、「する」は i となり、それぞれに -yoo がつくことになる。<sup>xii</sup>

(13) I グループ：貸ソウ kas-oo

II グループ：タベヨウ tabe-yoo、見ヨウ mi-yoo

III グループ：シヨウ si-yoo、来ヨウ ko-yoo

この意志・勧誘形をつくる -yoo の y [j] も、非過去形をつくる -ru の -r と同様に、母音



Ⅱグループ：タベテ *tabe-te*、見テ *mi-te*

Ⅲグループ：シテ *si-te*、来テ *ki-te*

Iグループの動詞は、過去形の形成の場合と同様に、中止形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合とおこらない場合がある。その変容・非変容の規則は、以下に示すとおり過去形と同様である。

(17) 変容なし

語幹末 *s-*                      貸シテ *kas-ite*

(18) 変容あり

語幹末 *t-・r-・w-*              勝ッテ *kat-ite > katte*、刈ッテ *kar-ite > katte*、  
買ッテ *ka[w]-ite > katte*

※ *t-i*、*r-i*、*w-i* は促音（つまる音）にかわる

語幹末 *b-・m-・n-*              飛ンデ *tob-ite > tonde*、囓ンデ *kam-ite > kande*、  
死ンデ *sin-ite > sinde*

※ *b-i*、*m-i*、*n-i* は撥音（はねる音）にかわり、

かつ *te* は *de* に変容する

語幹末 *k-・g-*                      書イテ *kak-ite > kaite*、嗅イデ *kag-ite > kaide*

※ *k-i*、*g-i* は *i*（イ音）にかわり、

かつ *g-i* に後続する *te* は *de* に変容する

Iグループの動詞の中止形を形成する *-ite* の *-i* も、過去形の *-i* と同様に、子音語幹に語尾の本体 *te* を結びつける役をはたす結合母音である。

### 3.6. 条件形（バ形）

条件形（バ形）は、Iグループの子音語幹動詞では語幹に *-eba*、IIグループの母音語幹動詞では語幹に *-reba* をつけ形成される。IIIグループの動詞は、条件形の形成に当たっては、「来れば」「すれば」となり、ともに語幹末母音は *u* となり、*-reba* がつくことになる。

(19) Iグループ：貸セバ *kas-eba*

IIグループ：タベレバ *tabe-reba*、見レバ *mi-reba*

IIIグループ：スレバ *su-reba*、来レバ *ku-reba*

このII、IIIグループの条件形をつくる *-reba* の *r* も、非過去形をつくる *-ru* の *-r* と同様に、母音語幹に語尾の本体 *eba* を結びつける役をはたす結合子音である。子音語幹には、語尾

本体が何もとらずそのまま結びつく。

### 3.7. 前提形（タラ形）

前提形（タラ形）は、Iグループの子音語幹動詞では語幹に *-itara*、IIグループの母音語幹動詞では語幹に *-tara* をつけ形成される。IIIグループの動詞は、前提形の形成に当たっては、「来たたら」「したら」となり、ともに語幹末母音は *i* となり、*-tara* がつく。

(20) Iグループ：貸シタラ *kas-itara*

IIグループ：タベタラ *tabe-tara*、見タラ *mi-tara*

IIIグループ：シタラ *si-tara*、来タラ *ki-tara*

Iグループの動詞は、過去形、中止形の形成の場合と同様に、前提形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合とおこらない場合がある。その変容・非変容の規則は、以下に示すとおり過去形、中止形と同様である。

(21) 変容なし

語幹末 *s-* 例：貸シタラ *kas-itara*

(22) 変容あり

語幹末 *t・r・w-* 勝ッタラ *kat-itara* > *kattara*、

刈ッタラ *kar-itara* > *kattara*

買ッタラ *ka[w]-itara* > *kattara*

※ *t-i*、*r-i*、*w-i* は促音（つまる音）にかわる

語幹末 *b・m・n-* 飛ンダラ *tob-itara* > *tondara*

嚙ンダラ *kam-itara* > *kandara*

死ンダラ *sin-itara* > *sindara*

※ *b-i*、*m-i*、*n-i* は撥音（はねる音）にかわり、

かつ *ta* は *da* に変容する

語幹末 *k・g-* 書イタラ *kak-itara* > *kaitara*

嗅イダラ *kag-itara* > *kaidara*

※ *k-i*、*g-i* は *i*（イ音）にかわり、

かつ *g-i* に後続する *ta* は *da* に変容する

Iグループの動詞の前提形を形成する *-itara* の *i* も、過去形、中止形の *-i* と同様に、子音語幹に語尾の本体 *tara* を結びつける役をはたす結合母音である。

### 3.8. 逆接形（タッテ形）

逆接形（タッテ形）は、Ⅰグループの子音語幹動詞では語幹に *-itatte*、Ⅱグループの母音語幹動詞では語幹に *-tatte* をつけ形成される。Ⅲグループの動詞は、逆接形の形成に当たっては、「来たって」「したって」となり、ともに語幹末母音は *i* となり、*-tatte* がつくことになる。

(23) Ⅰグループ：貸シタッテ *kas-itatte*

Ⅱグループ：タベタッテ *tabe-tatte*、見タッテ *mi-tatte*

Ⅲグループ：シタッテ *si-tatte*、来タッテ *ki-tatte*

Ⅰグループの動詞は、過去形、中止形、前提形の形成の場合と同様に、逆接形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合とおこらない場合がある。その変容・非変容の規則は、以下に示すとおり過去形、中止形、前提形と同様である。

(24) 変容なし

語幹末 *s-* 例：貸シタッテ *kas-itatte*

(25) 変容あり

語幹末 *t・r・w-* 勝ッタッテ *kat-itatte* > *kattatte*

刈ッタッテ *kar-itatte* > *kattatte*

買ッタッテ *ka[w]-itatte* > *kattatte*

※ *t-i*, *r-i*, *w-i* は促音（つまる音）にかわる

語幹末 *b・m・n-* 飛ンダッテ *tob-itatte* > *tondatte*、

囃ンダッテ *kam-itatte* > *kandatte*

死ンダッテ *sin-itatte* > *sindatte*

※ *b-i*, *m-i*, *n-i* は撥音（はねる音）にかわり、

かつ *ta* は *da* に変容する

語幹末 *k・g-* 書イタッテ *kak-itatte* > *kaitatte*

嗅イダッテ *kag-itatte* > *kaidatte*

※ *k-i*, *g-i* はイ *i*（イ音）にかわり、

かつ *g-i* に後続する *ta* は *da* に変容する

Ⅰグループの動詞の逆接形を形成する *-itatte* の *-i* も、過去形、中止形、前提形の *-i* と同様に、子音語幹に語尾の本体 *tatte* を結びつける役をはたす結合母音である。

### 3.9. 例示形（タリ形）

例示形（タリ形）は、Ⅰグループの子音語幹動詞では語幹に -itari、Ⅱグループの母音語幹動詞では語幹に -tari をつけ形成される。Ⅲグループの動詞は、例示形の形成に当たっては、「来タリ」「シタリ」となり、ともに語幹末母音は i となり、-tari がつくことになる。

- (26) Ⅰグループ：貸シタリ kas-itari  
Ⅱグループ：タベタリ tabe-tari、見タリ mi-tari  
Ⅲグループ：シタリ si-tari、来タリ ki-tari

Ⅰグループの動詞は、過去形、中止形、前提形、逆接形の形成の場合と同様に、例示形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合とおこらない場合がある。その変容・非変容の規則は、以下に示すとおり過去形、中止形と同様である。

(27) 変容なし

語幹末 s- 例：貸シタリ kas-itari

(28) 変容あり

- 語幹末 t・r・w- 勝ツタリ kat-itari > kattari  
刈ツタリ kar-itari > kattari、  
買ツタリ ka[w]-itari > kattari  
※ t-i, r-i, w-i は促音（つまる音）にかわる
- 語幹末 b・m・n- 飛ンダリ tob-itari > tondari  
嚙ンダリ kam-itari > kandari  
死ンダリ sin-itari > sindari  
※ b-i, m-i, n-i は撥音（はねる音）にかわり、  
かつ ta は da に変容する
- 語幹末 k・g- 書イタリ kak-itari > kaitari  
嗅イダリ kag-itari > kaidari  
※ k-i, g-i はイ i（イ音）にかわり、  
かつ g-i に後続するタ ta は da に変容する

Ⅰグループの動詞の例示形を形成する -itari の -i も、過去形、中止形、前提形、逆接形の -i と同様に、子音語幹に語尾の本体 tari を結びつける役をはたす結合母音である。

Ⅰグループの動詞における過去形、中止形、前提形、逆接形、例示形の形成（それぞれ語尾助辞 -ita、-ite、-itara、-itatte、-itari をつける）からみると、-it で始まる文法形態素の接合を受けると子音語幹は語幹末子音の姿に応じて促音便、撥音便、イ音便がおこるとま

日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－  
めておくことができる。

### 3. 10. 汎用形（連用形）（イ／エ形）

汎用形（連用形）は、Ⅰグループの子音語幹動詞では「貸し」kas-i、Ⅱグループの母音語幹動詞では「食べ」tabeとなる。一見、汎用形（連用形）の語尾助辞は-iのように思えるが、そのように考えると母音語幹動詞においては、汎用形（連用形）はなんら語尾助辞をとらない語形となってしまう。本稿では、なにもつかないといったあり方の助辞を認め、母音語幹動詞においてもなにもつかないといったあり方の助辞、つまり-φ（ゼロ）とった語尾助辞がつけられると考える。この-φ（ゼロ）を汎用形（連用形）形成のための助辞本体であるとする。

上記のように考えると、汎用形（連用形）は、Ⅱグループの母音語幹動詞では語幹に-φをつけ、Ⅰグループの子音語幹動詞では語幹に-iφをつけ形成されるとなる。Ⅲグループの動詞は、汎用形（連用形）の形成に当たっては、「来（き）」「し」となり、ともに語幹末母音はiとなり、-φがつくことになる。

(29) Ⅰグループ：貸シ kas-i φ

Ⅱグループ：タベ tabe- φ、見（み） mi- φ

Ⅲグループ：シ si- φ、来（き） ki- φ

Ⅰグループの動詞の汎用形（連用形）を形成する-iφの-iも、過去形、中止形、前提形、逆接形、例示形の-iと同様に、子音語幹に語尾の本体φを結びつける役をはたす結合母音と考える。ただ、汎用形（連用形）をつくる語尾助辞の本体はφ（ゼロ）であり、-iはそのφを子音語幹に結びつける結合母音と考えることができるにしても、事実上は、子音語幹を発音可能なかたちにする母音にすぎない。母音語幹は、事実上はそのまま汎用形（連用形）（汎用形）となる。

## 5. まとめ

これまで、形態的特徴からみた動詞の種類、さらに動詞が単語として文中でとる語形とその意味、さらにそのつくりかたについて検討してきた。

動詞の種類については、従来から考えられてきたように、語幹末の音によって3つのグループ（子音語幹動詞、母音語幹動詞、不規則変化動詞）に分けられることを確認した。

語形については、文の中での働き（文の終わりに使われるか、文の途中で使われるか）により「完結形（単独で完結している語形）」、「接続形（続ける語形）」、「原形（特定の用法をもたない語形・汎用形・連用形）」の3つに大別できることを確認した。さらに、「完結形」については、文をめぐっての話し手の伝達的な態度・話す目的の異なりにより1）叙述形と

2) 呼び掛け形とに分けられ、1) はテンス的意味の対立により、①非過去形、②過去形に、2) は働きかけのありようにより、③意志・勧誘形、④命令形に分けられた。「接続形」は後続する品詞の異なりにより、3) 連体接続形と4) 連用接続形とに分けられ、3) は表される事柄の順序(同時・前後)により、⑤非以前形、⑥以前形に分けられた。4) は、文中での働き(統合的 syntagmatic な意味・機能)により、⑦中止形、⑧条件形、⑨前提形、⑩逆接形、⑪例示形の5つに分けられた。

動詞の語形(語尾変化による語のかたち)については、①～⑪に、原形である⑫汎用形(連用形)を加えた12種がみとめられ、その12種について、それぞれ語尾助辞、結合要素、語幹の変容などについてもみてきた。最後に、動詞の語尾変化(肯定のかたち)について表にまとめておく。<sup>xiii</sup>

変 化 タ イ プ	類 別	I 言い切るかたち (完結形)				II 接続するかたち (接続形)				III 不特定なかたち					
		1. 叙述するかたち (叙述形)		2. 働き掛けるかたち (呼び掛け形)		3. 名詞に接続するかたち (連体接続形)		4. 名詞以外に接続するかたち (連用接続形)		(原形)		(活用形)			
		①非過去形 (辞書形)	②過去形 (カ行)	③意志・勧誘形 (ヨウ形)	④命令形 (エノロ形)	⑤非以前形	⑥以前形	⑦中止形 (ク行)	⑧条件形 (ハ行)	⑨前提形 (タマ行)	⑩逆接形 (タツ行)	⑪例示形 (カ行)	⑫汎用形 (連用形)	⑬イ/エ形	
規則変化	子音動詞	kas-	貸す	貸した	貸そう	貸せ	貸す	貸した	貸して	貸せば	貸したら	貸したり	貸し	貸し	
		kas-	貸す	kas-ita	kas-oo	kas-e	kas-u	kas-ita	kas-ite	kas-eba	kas-itara	kas-itatte	kas-itari	kas-i-phi	
		kat-	勝つ	勝った	勝とう	勝て	勝つ	勝った	勝って	勝てば	勝ったら	勝ったって	勝ったり	勝ち	勝ち
		kat-	勝つ	katta	kata-oo	kata-e	kat-u	katta	katte	kat-eba	kattara	kattatte	kattari	kat-i-phi	kat-i-phi
		kar-	刈る	刈った	刈ろう	刈れ	刈る	刈った	刈って	刈れば	刈ったら	刈ったって	刈ったり	刈り	刈り
		kar-	刈る	katta	kai-oo	kai-e	kar-u	katta	katte	kar-eba	kattara	kattatte	kattari	kar-i-phi	kar-i-phi
		ka[w]-	買う	買った	買おう	買え	買う	買った	買って	買えば	買ったら	買ったって	買ったり	買い	買い
		ka[w]-	買う	katta	ka[w]-oo	ka[w]-e	ka[w]-u	katta	katte	ka[w]-eba	kattara	kattatte	kattari	ka[w]-i-phi	ka[w]-i-phi
		tob-	飛び	飛んだ	飛ばう	飛び	飛び	飛び	飛んで	飛び	飛べば	飛んだら	飛んだら	飛び	飛び
		tob-	飛び	tonda	tob-oo	tob-e	tob-u	tonda	tonde	tob-eba	tondara	tondatte	tondari	tob-i-phi	tob-i-phi
		kam-	噛む	噛んだ	噛もう	噛め	噛む	噛んだ	噛んで	噛めば	噛んだら	噛んだら	噛んだり	噛み	噛み
		kam-	噛む	kanda	kam-oo	kam-e	kam-u	kanda	kande	kam-eba	kandara	kandatte	kandari	kam-i-phi	kam-i-phi
sin-	死ぬ	死んだ	死ぬ	死ぬ	死ぬ	死ぬ	死んで	死ねば	死んだら	死んだら	死んだり	死に	死に		
sin-	死ぬ	sinda	sin-oo	sin-e	sin-u	sinda	sinde	sin-eba	sindara	sindatte	sindari	sin-i-phi	sin-i-phi		
kek-	書く	書いた	書こう	書け	書く	書いた	書いて	書けば	書いたら	書いたって	書いたり	書き	書き		
kek-	書く	kaita	kak-oo	kek-e	kak-u	kaita	kaite	kek-eba	kaitara	kaitatte	kaitari	kak-i-phi	kak-i-phi		
kag-	嗅ぐ	嗅いだ	嗅ごう	嗅げ	嗅ぐ	嗅いだ	嗅いで	嗅げば	嗅いだら	嗅いだら	嗅いだり	嗅ぎ	嗅ぎ		
kag-	嗅ぐ	kaida	kag-oo	kag-e	kag-u	kaida	kaide	kag-eba	kaidara	kaidatte	kaidari	kag-i-phi	kag-i-phi		
tabe-	たべる	食べた	たべよう	たべろ	たべる	食べた	食べて	たべれば	たべたら	たべたって	たべたり	たべ	たべ		
tabe-	たべる	tabe-ta	tabe-yoo	tabe-ro	tabe-ru	tabe-ta	tabe-te	tabe-eba	tabe-tara	tabe-tatte	tabe-tari	tabe-phi	tabe-phi		
mi-	見る	見た	見よう	見ろ	見る	見た	見て	見れば	見たら	見たら	見たり	見	見		
mi-	見る	mi-ta	mi-yoo	mi-ro	mi-ru	mi-ta	mi-te	mi-eba	mi-tara	mi-tatte	mi-tari	mi-phi	mi-phi		
ku/o/i-	来る	来た	来よう	来い	来る	来た	来て	来れば	来たら	来たら	来た	来	来		
ku/o/i-	来る	ki-ta	ko-yoo	ko-i	ku-ru	ki-ta	ki-te	ku-eba	ki-tara	ki-tatte	ki-tari	ki-phi	ki-phi		
su/-	する	した	しよう	しろ	する	した	して	すれば	したら	した	したり	し	し		
su/-	する	sita	si-yoo	si-ro	su-ru	sita	si-te	su-eba	si-tara	si-tatte	si-tari	si-phi	si-phi		

## 6. 参考文献

- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』第2版 スリエーネットワーク
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』ひつじ書房
- (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 高見澤孟 (2004) 『新・はじめての日本語教育1』アスク
- 中崎崇・城田俊 (2017a) 「日本語における語の認定と品詞分類をめぐって—日本語教師のための日本語文法をもとめて—」『就実論叢』、第46号、pp. 63-76、就実大学就実短期大学
- 中崎崇・城田俊 (2017b) 「日本語における語の構成をめぐって—日本語教師のための日本語文法をもとめて—」『就実表現文化』、第11号、pp. 1-13、就実表現文化学会
- 仁田義雄 (2000) 「単語と単語の類別」『文の骨格』岩波書店
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版

---

<sup>i</sup> 本稿での日本語教育とは、日本語非母語話者に対する日本語教育に限らない。日本語母語話者に対する、いわゆる国語教育も含む。以後断らない限り、この意で日本語教育という用語を用いる。また日本語教師についても、非母語話者、母語話者に対する日本語教育を行うものといった意味で用いる。

<sup>ii</sup> 日本語教育では、それぞれの辞書形の語尾の末尾音によって、Iを-U動詞、IIを-RU動詞などと呼ばれることもある。

<sup>iii</sup> 辞書形の末尾がruで終わるIグループの動詞は、その他にkaru「刈る」-kari(masu)「刈り(ます)」、haru「張る」-hari(masu)「張り(ます)」などがある。

<sup>iv</sup> 「汎用形(連用形)」は、日本語教育では、丁寧な形である「貸します」のようないわゆるマス形をつくる語幹ということで「マス形語幹」と呼ばれることがある。

<sup>v</sup> 名詞に接続するかたちである「連体接続形」は、伝統的に(国文法や学校文法において)「連体形」と呼ばれている。本稿においても今後もこの用語を踏襲する。

<sup>vi</sup> 三原(1992)、高橋(2003)などでも指摘されているように、従属節のときは必ず主節時が基準となるわけではない。「転居する人は普通、転居後住民登録をする」では住民登録した後で転居するといった読みはできない。また「昨日太郎にあげた本は、私が3年前に偶然古本屋でみつけた」でも太郎に本をあげた後でその本を古本屋で見つけるという読みはできない。このように主節と従属節(この場合は関係節)がル形とル形、タ形とタ形のように同一時制形式を有する時、また「昨年」「3年前」のような発話時との前後関係があきらかにわかるときの状況語が連体形のそばにある時など、発話時を基準として成立する。このよ

うに常に「非以前形」が主節時よりも後、「以前形」が主節時よりも先であるといった順序を表すわけではない。さらに高橋（2003）（2005）で指摘されているように、関係を表す連体形動詞においては「言語学に（関係する／関係した）会合が開かれた」のように「以前形」と「非以前形」が対立することなく順序の違いを表さない。また「S字型に屈折した道が～」のように従属節が状態や性質を表す場合も、「以前形」が順序を表してはいない。高橋は、こういった動詞が述語でなくなった場合に動詞らしさがどのようになるかについて詳しく考察している。いずれにしても「以前形」「非以前形」は、常に順序といった意味を表すわけではないことに注意されたい。

vii 中止形が表す意味は、「髪をふりみだして走る」のような様態、「歯を磨いて、顔を洗って、出かけた」のような継起、「風邪をひいて、学校を休んだ」のような因果、「飲んで、歌って、騒いで」のような並列などさまざまある。

viii -u,-ru における「-」は語幹と語尾の境目を示す。

ix 子音語幹に語尾の本体を結びつける役をはたす母音を結合母音と呼ぶ。

x 融合については中崎・城田（2017a）参照のこと。

xi 本文で確認したように結合母音 i は、kas-u 貸すといった語幹末が s である動詞を除き、保存されず、語幹末子音の性質に従い、その子音と共に促音、撥音、イ音へと変容する。語尾本体である ta, tara, tatte, tari は母音語幹にはそのまま結びつく。

xii 「来(き)ようが来まいが」のように ki-yoo 来ヨウというかたちを耳にすることがあるが、このかたちは非正則的形である。（正則的かたちとは一般に「正しい」と思われているかたちをいう。非正則的とは、従って、一般に「正しい」と思われていないかたちである）。

xiii いくつかの語形の意味や用法については別稿で検討する予定である。